

ドストエフスキーとイヴァン

近田, 友一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004592>

ドストエフスキーとイヴァン

近 田 友 一

I

創作ノートによれば、イヴァンと悪魔の対話が記されているのは、第四部エピソードの百三十九頁及び七月三十日と日付のついている個所で、百五十六頁である。

無神論者の哲学者が、死後予想に反して開けた「他界」に驚き、天国への道を「信条として」拒否し、千年横たわっていたが、その後千兆キロメートルを歩き通し、天国の門をくぐって二秒もたたないうちに「千兆キロメートルを千兆倍して、さらにもう千兆倍しても歩ける」と叫んだという周知の挿話は、ノートでは肝心なところはわずかしかがかかれていない。

イヴァン一人。悪魔入ってきて、腰をかける（白髪の老人。疣）。会話。「お前は幻覚だ」。悪魔「わしは君に治療することを勧めるよ」。蝶の幼虫、オランウータン、人間。「わしは君に治療することを勧めるよ」。立ち上がって、突然出ていく。等々。「ぼくは自分の気持で見ている。しかし、これが正しいかどうかからん」。千年横になったままだった。天使たちの雷鳴のような歓喜の叫び。二つの真理。等々⁽¹⁾（『創作ノート』）

第四・エピソード

ノートでは、ホザナを「叫んだ」のは天使たちだが、決定稿では無神論者の方である。作者もこの辺は迷っていたであろうか。ノートでは十五頁ばかり先の「サタン」と題された個所にこんなメモがみえる。

悪魔は時々軽い咳をした（リアリズム、疣）。

「自由主義者、千年。『ホザナ』を叫びたかったのだ」。悪魔立ち去る。⁽²⁾（同前）

この「自由主義者」が決定稿の無神論者になるとすると、この二行は意味をもつ。無神論者を迎える天使たちの喜びの声から無神論者自身の叫びにドストエフスキーは変えたのであろうか。この「逆転」の意味は大きい。そこには作者の重味がかかっている。

いずれにしてもノートの簡略な記述と較べて決定稿ではこの挿話は有名になってしまった。しかし、そのわりには論者にあまり気にされているふしはない。作者がイヴァンにこの伝説を重ねた意図はどこにあるのだろうか。

イヴァンのなかにも潜在的な神性への憧憬があると考えるのはたやすい。だが、一筋縄でいかない作者がそんなことだけでこのエピソードをいれたのであろうか。読者は試されているのか、悪い冗談を言われているのか。

『対話』にはもう一つ「地質学上の変動」と題された挿話がおかれている。人類が立っている大地を揺がすほどの思考の変革という意味なのだろうが、創作ノートでは同じ百五十六頁に書込みがある――

サ（タン）「人生はみなマイナスで作られているんだよ」

サ（タン）「すべては許されている。君にとっては地質学的変化が成し遂げられたのだ」

重要なこと。NB サ（タン）「証明しようとする君の決意は、君がおじけづいた結果だ」

サ(タン)「善行もない、あるいは、不死もない。このことを君に言っておく」⁽³⁾(同前)

決定稿ではこう敷衍されている――

一旦人類がひとり残らず神を否定してしまえば(ところでぼくはこの時代が地質学上の時代と並行して実現すると信じている)、その時はおのずから、すべての以前の世界観、殊にすべての以前の道徳が、食人を俟たなくても崩壊して、すべて新しいものがやってくるのだ。……

今この真理を認めた者は誰でも、この新しい主義の上に全く好き勝手に落着くことが許されている。この意味で「すべては許されている」のだ。それに、もしこの時代が決して訪れないとしても、神も不死も、やはりないんだから、新しい人間は、この世界に一人きりであろうとも、人神となることが出来る。⁽⁴⁾(『カラマーゾフの兄弟』第十一篇九章)

作家がここにイヴァンの「人神論」をもってきたのは、「千兆キロメートル」の無神論者の挿話と並べるためではなかったか。無神論者の「ホザナー」は一つだけ独立させると、イヴァンにはやはり不自然である。いわば、複相的構造でイヴァンの心の幅を出そうとしたのであろう。

イヴァンでドストエフスキーはそれまでの思想の集成を語ろうとしている。その観点からポイントとなるのは、地下生活者とイッポリートであるように思われる――それは両者においてイヴァンにつながる思想がもっとも端的に表れているからである。

II

これまで地下生活者の反抗は、神なき後の世界を支配する科学的合理主義の否定とみられてきた。別に思想的に彼の姿勢を捉えることは誤りではないが、この「レトルトから生まれた」男はもっと人間的な拗ね方をしていたのではなくらうか。多分、それは彼自身もあまり意識していたことではなかったかも知れない。

『地下室の手記』にはまだ形而上的な主題も、宗教的なモチーフも本格的にあらわれてはいない。ただ、地下室の男のプリミティヴな「動き」には、その後のドストエフスキー文学の根幹にかかわるものが直截に表現されている。

地下生活者を支配しているのは「退屈」である。彼はどうしようもない「退屈さ」のなかに住んでいる——彼は自分の存在形態を問われれば、「退屈」と即答するであろう。行為の目的を持ち得ないこと、だから何もすることがない——それが地下生活者の生活である。彼は、クレオパトラが黒人の女奴隷の胸に金の針を刺して無聊を慰めていたという話を持ち出してくる。

「クレオパトラの金の針」は退屈の象徴であろう。地下生活者には彼の「金の針」を刺すべき相手が見つからない。リーザにも逃げられ、雪の十字路に立ちつくす……

この小説の主人公は、持て余している「退屈」の背後に、「不安」が潜んでいることにあまり気がついていない。二二が四の「石の壁」が、科学的合理主義が支配する地上の世界が気に入らないだけだと信じている。「不安」の姿をかりて「無」が顔をのぞかせているのにも無関心だ。地下生活者はその悲壮感とは裏腹にかなり楽天家なのである。「八十まで生きのびる」という冒頭の叫びは存外彼の本音かも知れない。

彼を悩ましているのは、「石の壁」でも、科学的合理主義でもない。「おれ」の意識である。

「ところで、ちゃんとした人間が心から満足して話せる話題は何だろう？ 答え——自分自身のことである。で

は、おれもその通り自分のことを話すでしょう——『地下室の手記』のモチーフは書出しのこの言葉に尽きている。彼は「自意識過剰は病気だ」と定義したが、それは「我在り」という意識をいかに処理するかということであろう。

地下生活者は「我在り」という意識を持たされたことの「意味」は意識していない。この厄介な荷物が人間にとつてどんなに手に余るものであるか——この主人公はそういう本質的な感じ方はしていないのである。いわば、現象的に「自意識過剰は病気だ」と言っているにすぎなからう。

地下生活者が自分の立っている地面まで否定したのは事実だし、自分自身まで拒否しようとしたのも偽りではないが、「我在り」という意識を持たされたことの「意味」は依然として手つかずで残っている。彼はそれを論理的には理解していない。彼が地下の穴蔵で自虐的に拗ねているのは、「石の壁」に対する否定の表現というよりも、彼自身にもよくわからない苛々した気持——存在そのもののもつ居心地のわるさを本能的に感じているからなのである。

そうみると、この作品は、主人公のもやもやした、握めそうにみえてやはり曖昧な気分をよく表している。それは作者自身が、まだ意識が不分明で、焦点が定まっていなかったからなのであるが、それが作品としては面白味になっている。それが小説という形式のもつ不思議さなのであろうか。

ただ、ここで表された問題はそのまま気分として終わるようなものでは全くなかった。その後時間をかけながら、やがて『白痴』のイッポリートの告白に収斂していくのである。

III

『地下室の手記』は、日常の退屈さのなかで「我在り」という意識をもて余している男の物語であった。彼自身思索に沈潜しているようにみえながら、「退屈」も「我在り」も考え尽くされてはいない。『地下室』から四年後の

イッポリートに至って「我在り」は形而上の意味をもつのである。

重い肺患で残り時間の限られている十八歳のイッポリートには、退屈する余裕はない。「退屈」の陰に潜んでいるはずの「不安」がじかに顔を出す。彼の存在の一切を規定しているものは、死の不安である。余命二週間と宣告されているこの若者には四六時中不安の影が消えない。彼にとっては地下生活者の「悶え」など贅沢の極みなのだ。この時間の限定された若者のところでは、煩悶は簡明な質問に昇華する。

こう想像した方がはるかに正確である——なにかしら全体としての宇宙のハーモニーを充足させるために、なにかのプラス・マイナスのために、なにかのコントラスト等々のために、ぼくの取るに足らぬ生命、アトム
の生命がただ必要なのだろう、と。

……しかし、その代りぼくはしっかり承知している——一旦、「我在り」という意識を与えられた以上、世界が誤謬だらけであろうと、またその誤謬なしには世界が存立していけなかりと、一体ぼくに何のかかわりがあるのだろうか。(『白痴』第三篇七章)

ドストエフスキーは『白痴』で初めて腰をすえて形而上学の領域に入った。彼は死を目前に控えた十八歳の若者を登場させることによって、人間に不可避な、根源的な問題を問おうとしたのである。イッポリート・チェレンチェレフの問の特徴は、その単純さと率直さにある。多分、作家は問題を直截にするためにイッポリートのよう
な、まだ少年ともいえるような若者を主人公に据えたのであろう。

イッポリートは二週間後の死を前にして自分の存在した意味を得心しようとしている。それは作者が十八年前、セミョーノフスキー練兵場で五分後の死を凝視していた姿勢と重なる。そこには人間存在の裸の姿がある。イッポリートには漠然とした不安はすでない。死への存在として、焦点の絞られた死への恐怖がある。

すでに彼は掛け値の全くきかない存在である。絶対者に対する彼の問はそこから発せられている。イッポリート

は極限に追い込まれた地点で、人間のもつ「意識」の重荷に気がついた——「我在り」という意識こそがすべての「蹟きの石」である。彼は「我在り」という意識を人間にもたせた責任を「宇宙の意志」に問おうとする……

彼は自分の存在の「無意味」に耐えられず、「無意味」を意識する自分に耐えられない。「意味」を知るということは人間にとって生死に関わるほど大事なことなのであろうか。少くともイッポリートは、人間存在の基本図式の根底にそれはあるべきものだと考えていた。

一切を知らされていない在り方しか人間に許されていないのは何故か——というのが彼のもっとも納得できないことであつたと言える。「意味」不明の大海に漂いながら「我在り」の明確な意識だけはもちつづけなければならぬとしたら…… ドストエフスキーはこの宿命的な「矛盾」を人間存在全体の問題としてイッポリートに負わせている。

この若者がなによりも気にしているのは「調和」の問題である。「調和」は、もしその中に入ることが出来れば、なんらかの「意味」をもつことが可能だからである。少なくとも「意味」をもったと独断することは出来るからである。だから彼は「調和」を憧憬し、また嫉妬している。

君たちの自然、君たちのパヴロフスクの公園、君たちの日の出、日の入り、君たちの青空、君たちの満ち足りた顔も——今やいつ果てるともしれない宴がぼくひとりだけを余計者にみなして、いよいよ始まっている時——一体、このぼくにとって何になるというのか？ いまぼくのそばで日の光を浴びながら唸っているいとささやかな一匹の蠅さえもこの饗宴と合唱に加わり、自らの所を心得て、それを愛し、幸福に浸っているのに、このぼくだけが見棄てられているのだ。今まで臆病なためにこのことを語ろうとしなかったままでのだ——と一分一秒ごとに感じさせられ、強いられる時に、なにもかも美しい中に入ることが私にとって何だというのか！(同前)

「調和」の考え方はドストエフスキーには少年時代から馴染みのものである。兄ミハイルに宛てた周知の十七歳の手紙にはすでに「調和」のことが触れられている。

ぼくにはこの世界が罪深い想いに曇らされた精霊たちの煉獄のような気がします。この世界が否定的な意味をとったので、高尚で美しい精神的なものは諷刺になってしまったように思われます。もし、この画面の中に働きでも考え方でも全体と共通点のない人間、つまり、全く無関係な人間が出現したとしたら、どうなるでしょう。画面は台なしになって、存在することも出来ません。(一八三八年八月九日付兄ミハイル宛書簡)

人間は宇宙の孤児——という考え方がドストエフスキーにはすでに若年の頃からあった。「調和」に拒絶された人間という感覚は三十年の歳月を経て再び明確な形をとってあらわれてきたのである。

世界に自分の居るべき場所がないとしたら、折角の「我在り」の意識も救われないであろう。どこに意味を求めたいのか。自らの意志ではなく、大いなる意志によって「生かされている」と観ずれば、そこにはまた遁れる道もあるであろう。しかし、イッポリートにはそれはもっとも難しい選択である。

「生かされている」ことを得心しない以上、人間の生は意味をもたないとしたら、それは、そういう存在の「させ方」に問題があるのだというのが彼の根本思想であろう。始めもわからず終りも知らないとしたら、それは本当に存在したことになるのだろうか。人間は「中間的存在」として終始しなければならないか、あるいは、「中間的存在」としのみ存在が許されているのであろうか。

イッポリートはそれに厳しく反発する——「もしぼくが生まれない権利をもっていたら、こんな人を馬鹿にしたような條件では、存在を肯じなかったに相違ない」。作者は彼を否定の極北に立たせる。人間存在の形だけでなく、その存在の仕方だけでなく、その存在の「させられ方」にまで踏み込み、はじめて明確な形で否定した——おそらく、イッポリートの最大の意味はこの一点にかかっているのかも知れない。

IV

地下生活者は、どう自分を「在らしめ」たらいいいのか、論理的には擱めなかった。これが彼をファナティックにした要因であり、「全世界と一杯のお茶を交換する」と喚いたエゴイズムの本質である。要するに、彼はどう座っても座り心地が悪いのだ。まさに、居るべき場所がないのである。地下生活者がいつも不機嫌であり、人に当たり散らすのは、このためである。それを彼は「肝臓のせい」だと言っている。彼は居心地よく人生を送ったことがない。その「かけがえのない」居心地の悪さが地下生活者の実存であり、「不調な肝臓」はその象徴なのである。

この「よくわからないが不愉快」という「気分」を作家は巧みに捉えている。『地下室の手記』というのは、難解な「哲学」をこねまわしている小説ではなく、むしろ、人生の許容し難い不愉快さを吹きまくった創作なのである。

八つ当たり小説というものとすれば、『地下室の手記』はまさにそれに当てはまる。それは、彼に冷たい他人への八つ当たりであるばかりでなく、釈然としない人生への、無責任な「絶対者」へのそれである。

地下人に比べれば、イッポリート・チェレンチェフは真面目で、純粹な男である。彼は「地下室」からの発想を整理して、理性で物を言おうとしている。その根底にあるものは変わらないが、姿勢は全く異なる。それは三年の間に「死の家」帰りの作者の気持ちも沈静化し、想念の意味の見極めもついてきたということであろうか。

イッポリートの提出した問題は、その後のドストエフスキー文学の辿るべき道を示している。その意味でイッポリートの存在は大きい。キリーロフもスタヴローギンも、そして勿論イヴァンもイッポリートなしでは考えられないであろう。イッポリートは広大なドストエフスキーの森の北端の「杭」である。

イッポリートの出した最大の問題は、人間の存在を規定しているものはないかということであり、「我在り」という厄介な意識をどう処理するかということである。ここでドストエフスキー文学の骨格は決まってくる。

IPPORIトは人間が「死への存在」であることを體現している。彼は死を正面に見据え、死から逆に生を探ろうとする。死の逆光線をとおしてのみ存在の本質は顯になる。

作家はIPPORIトを描くことによって死への時間が人間の存在を規定していく形を象徴化してみせた。始原も終末も知ることを得ない「中間的存在」である限り、人間は有史以来の今の存在の形態を続けなければならない。IPPORIトは自分の終末の形を自ら決定することによって——不明の時間を自ら確定することによって、ほんの少しでも「中間的存在」から抜け出ようとした。

地下生活者は「自由」の確保に苛立ったが、それは執拗な生への意志をつらぬくためであり、IPPORIトは死への意志を明確にすることによって、僅かに残されているかにみえる「自由」を行使しようとした。

「自由」は生の基本——という認識では両者は共通している。しかし、「生への自由」か、「死への自由」かという点で、その「自由」の解釈、理解は全く異なる。IPPORIトは、自己の生について何も知ることを得ない盲目的存在であることをあくまで拒否する。彼には、生への意志を貫こうとする地下生活者は、おそらく、このうえない幸福な楽天家にみえたことであろう。

地下生活者は「意識の過剰は病氣である」と定義した。しかし、それはIPPORIトのように、すべての「躓きの石」になるような厄介な「我在り」の意識ではない。「我在り」を主張するために地下の穴蔵に潜っても「我」の自意識を確保しつづけようとする自意識なのである。

IPPORIトでは、自意識過剰の「意味」が問われることはない。「我在り」の意識を人間にもたせながら、何一つ教えようとしない「何者」かの責任が問われているのである。さらに、彼の許ではその問そのものの意味——有効性が問われている。その問は何の意味ももたず、何の反応もなく、いたずらに虚空に吸い込まれていくだけではないのか。「ただ地球の殻が回っているだけならば、意識の透徹した生きものをただ死滅させるだけのためにどうして地上に生み出す必要があったのか」——IPPORIトの懷疑は、むしろ、恐怖の響きさえおびている……人間は問うことすら出来ない虚空の中に投げ出されて、「居る」のではないのか。IPPORIトの「我在り」の意

識も最後には無限地獄に滑ってゆく。

ドストエフスキーのもっともユニークなところは、もしかしたら、この地球の歴史が「寸分の狂いもなく」、もう十億回も繰返されているかも知れないと想像していることである。『おかしい人間の夢』のような独立した作品にまで仕上げられているのを見ると、存外本気だったのではなからうか。

その十億回かの一回を今われわれはただ一度きりのものとして生きている。IPPORIトのような人間も意識も寸分の狂いもなく出現することになる。地球の歴史の退屈な繰返しがあれば、IPPORIトの問の無意味な反復もあるのだろうか。

ただ、ドストエフスキーの妄想のように、地球の歴史が反復の歴史であったにせよ、人間が現存在としてかけがえのない一回だけの生を生きていることは事実だ。反復とは全くなんの関係もなく、「我在り」の意識は存在し、どうにかしなければならぬ。反復があったにせよ、その意識は消去されることも、局限化されることもなく連続として続き、人間を困惑させることをやめない。

ドストエフスキーはこの「我在り」の意識のしぶとさに困却し、ただ長い歴史のほんの瞬間の現象にすぎないと言ってみただけなのだろうか。

見えない対象を見つけたすことは難しくても人間の在り方をめぐっての不満と憤怒をぶつけることは出来る。命数の限られた若者にこそその仕事はふさわしい。作者はIPPORIトをとおしてこの試みをやってみた。IPPORIトの問を単純直截に絞ることによって問の本質は明らかになってきたのである。

V

ドストエフスキーは頭上に綱で吊るされた大石の話を持ってきた。人は意識をもった瞬間からこの大石を意識せざるを得ない——その大石は無限に延び、その下から遁れ出ることは不可能である。大石は死の象徴であるが、同時に人間存在そのものでもある。人間は気がついた時にはすでに大石の下にいて、その綱が切れる時間は知らされていない。人間は「我」と「大石」の意識の両立の中で生きている。

人間に気晴しが重要な意味をもつのは大石が頭上にあるからである。人は毎瞬毎瞬大石を意識しているわけにはいかない。そんな緊張のなかでは耐えられない。遁れられない「不安」を直視しないことが人間の在り方であり、知恵である。

人間存在の本質が「不安」であるならば、一切の細工なしで「不安」と対峙し、これを越えようとする人物が現われてくる。「退屈」、「気晴し」がひとつの生き方としてあることは彼も認める。しかし、それは本来のものではない。キリーロフの「人神」はかかる背景をもっている。

キリーロフは「絶対の自由」とは何かと考えている。人間が死の観念に脅かされている以上、「絶対の自由」はないと彼は確信する。イッポリートは人間の存在のさせられ方に抗議したが、キリーロフは自らの手で存在の仕方——形を決めてしまおうとする。そのための「絶対の自由」なのであり、人間の最大の弱点を「何者」かに握られている限り、人間の本源的な生はあり得ない。

キリーロフは死を超えることによって人間の存在の「革命」を企図している。彼の死を先取りしようとする考え方は「自死」という行為を当為としない限り、それほど奇異なものでもない。彼は、自死によって「大石」の恐怖を克服した者は「神」になると宣言しているが、そうまでして「神」になっても仕様がないうのが常人のキリーロフ評であろう。

ただ、この誠実で真摯な技師は万人にそれを強要してはいない。その絶対者の「トリック」に気づいた最初の者だけでいいのである。ここに彼の気の弱さと「人神論」のロマンがある。

「人神論」が虚構であり、荒唐無稽であろうと、キリーロフが人間存在の形を極点にまでおしすすめて考えていたことには違いない。彼はイッポリートが「何者」かに抗議した意味を正確に理解していた。そしてその解決なしには存在の真の意味を考えることも不可能であること、人間は従前どおり生物的な生を生きつづけることになることも承知していたのである。イッポリートがキリーロフにリレーした宿題はそのままイヴァンに渡される。

VI

「調和」という考え方に最初に異議を挟んだのはイッポリートである。自分には全くわけのわからない宇宙のプラス・マイナスのために当人にはなんの断りもなく生命を召し上げられるのはどう考えても不条理ではないか——と彼は主張した。イヴァンではこの言葉はこう翻訳される——「どこの馬の骨だかわからない奴のために犠牲になって未来の調和を贖うのは真っ平だ」と。

イヴァンの世界観はほとんどこの言葉に尽きている。無事な子供たちの犠牲の上に「調和」が築かれるならば、それは余りにも高価であり、「神の世界の入場券を謹んでお返しする」という高名な科白は彼の本心のカムフラージュにすぎなからう。

イヴァンが先人たちともっとも違うのは、絶対者の探究そのものは諦めて、放棄してしまっている点である——それはユウクリッド的知性しかもたない三次元の人間には絶対わからないことなのだ。イヴァンの思考は物自体の世界の解明の断念から始まる。

で、ぼくは神を承認する。よろこんで承認するばかりでなく、そのうえ神の英知も、また、われわれには皆

目わからないがその目的も承認する。秩序も人生の意義も信じるし、われわれがみな一つになれるとかいう永遠の調和も信じる。宇宙が目指している道、神とともにある道、神自身である道を信じる。その他等々無窮に信じるよ。

……ところがいいかい、ぎりぎりのところで、ぼくはこの神の世界を承認しないのだ。それが存在していることは知っているけれどもそれを容認することは全く出来ないのだ。⁽⁸⁾『カラマーゾフの兄弟』第五篇三章)

イヴァンには神を認めるということと神の世界を承認するというこの間には天地の隔りがある。生の始原も終末も一切知らされず、ただ「中間的存在」として存在させられている人間存在の形を——人を「中間的存在」としてのみ存在させている神の世界をイヴァンは峻拒する。それは他の存在するものとは異なる存在者——人間の「存在」ではない。

神は無言であり、そのわけを語らないならば、本来、「世界」は無意味なのか、また意味があっても、人間には無意味なことに同じである。イヴァンは、それでもなお神に頼ろうとする心情が人にあることを承知している。悪魔との対話で「神の観念さえ破壊すれば食人主義思想を俟つまでもない」と言っているのはこの間の事情を語っている。

彼には神があろうがなからうが、そんなことはどうでもよいのだ。人間の新しい在り方を考えるためには、無力な神はただ邪魔になるだけなのである。世界に意味がなく、ただそこに在るだけならば、人はそのことを一切の偽瞞なしに明確に認識しなければならない。「絶えず事件から事件に流れていく」のが世界ならば、冷徹にその事実を凝視することから人間は再出発すべきなのだとイヴァンは考えている。

地下生活者はこの世界の居心地の悪さに不満をいだき、イッポリートは人の生命を恣意に遊ぶ「何者か」に衝突したが、それはすべて「意味」を求めすぎるからだといヴァンは観じる。あるいは、それだけ彼らは神に価値をおいているためであるかも知れぬ…… 居るか居ないかもわからぬ絶対者に。

イヴァンが先人たちと異なるところは、絶対者の価値を無視している点であろう——彼はその意義を全く認めていない。神は傍観者であり、傍観者である神は不要な存在であるばかりなのだ。

「我在り」という意識が地下人を悩まし、イッポリートを苦しめつづけた。これをなんとかしない限り、新しい人類の「存在する」形はない。神を無視し、神の世界を否定することによって新たな価値体系を考え出すとすれば、それは何か——イヴァンの思考はここから始まる。

VII

イヴァンは「都」でのアリョーシャとの対話で十八世紀の老無神論者の言葉を持ち出す——もし神がなかったら創り出す必要がある」。このエピグラムは彼の心底深くひっかかっていたものであり、イヴァンの発想の根源になっている。

そして本当に、人間は神を考え出した。神が実際に存在していることが不思議でもなく、驚くべきことでもなく、神が必要だという考えが——そんな考えが、人間のような野蛮で悪辣な動物の頭に入りこんだということが驚嘆すべきことなのだ。この考えはそれほど神聖で、感動的で、英知にとみ、人間の名誉になることなのだ。⁽⁹⁾ (同前)

もし「意味」がなかったら、「意味」を創り出す必要がある——「我在り」の厄介な意識を処理するとしたら、これしかないというのがイヴァンの着想であろう。彼の思想はすべてこの前提の上に成り立っている。彼の劇詩『大審問官』はこのシンボリックな表現である。

人が生の意味に何を求めているのか。『大審問官』はイヴァンの逆転の——“虚”の発想から創り出されている。

ドストエフスキーにはローマン・カソリックは「無神論」だという牢固とした信念がある。このことは『作家の日記』で執拗に触れられている。作家はこの教派の教義をきわめて巧妙に物語のフレームに転用している。彼の独断がこれほど見事にトランスレイトされると、『作家の日記』でのドストエフスキーの常識的な、なまの意見などどこかへすっ飛んでしまう。イヴァンは「ローマン・カソリックのなかにも一人くらい大審問官のような悲劇的人物がいてもいいじゃないか」と思わず弟に述懐するが、この言葉にはドストエフスキーの思いがこめられている。

『大審問官』は、「自由」を中心にした論議が焦点になっている。キリーロフは「絶対的自由」を求め、「人神」の觀念に到り着いたが、イヴァンは「自由」そのものを検討しようとする。『すべては許されている』にしても、果して人間はその扱いかねる、途方もない「自由」に耐えられるか——おそらく、人々はその重さに耐えかねて投げ出すに違いないというのがイヴァンの認識である。

この認識が彼の人間理解の基礎にある。イヴァンは、ラスコーリニコフのように積極的に人間にランクをつけているわけではないが、少数の選ばれた人間とその他の民衆とを区別はしている。

地下生活者もイッポリートもキリーロフも自分の「我在り」の意識をいかに処理するか追われていて、他人まで手がまわらなかった。民衆に目を向けたのは——彼らを「だし」に使ったのだといえ——イヴァンが初めてである。

少数者と民衆を分ける一点は、後者が、自分が「中間的存在」であることに気がついていないことであり、疑問をいだいていないことである。

イヴァンは、彼らには「自由」がこの上ない重荷であり、「絶対者」が必要であることを的確に看とった。彼らに必要なのは一刻も早く「自由」を預ってくれる者であり、奇跡と神秘と教権である。民衆は奇跡を信じ、神秘に酔い、その前にひざまづく共通の対象を求めている——イヴァンの大審問官はこの民衆の要求を集約した形で現われる。それはイヴァンが創った人工の「意味」であり、先人たちが探究した「意味」とは違う。「大審問官」の

作者は、民衆がこの偽瞞に気づかない限り彼らは幸福なのだと言い、神を失った人々を救ったのだと信じようとした……「何億かの幸福な幼児と何十万かの善悪認識の呪いを背負った受難者が出来るわけだ」とイヴァンは長い弁舌を結ぶ。

「大審問官」でイヴァンが人工の「意味」を創作したということは、真の「意味」の探究を断念したということでもある。彼が三次元の観念しかもたない人間の英知を超えていると言い、神性にかかわる一切のものを是認したとき、イヴァンはこの世界が非意味の世界であり、ただ生成する世界であるかも知れないということを深く認識していたのであろう。

「意味」の断念から「意味」の創造は始まり、自己神——人神に至る……ドストエフスキーはイヴァンの流れを綿密に追った——論理を追っていく限りイヴァンに救いはない。

VIII

作家のなかでは、「我在り」という意識と、イヴァンの悪魔が語る「商家の内儀」への変身願望は、多分、対蹠になって牽き合っている。

ぼくが夢想しているのは、何かこう肥った、七ブードもある商家のかみさんみたいなものに変身することだ。しかも、金輪際二度と元に戻らないようにな。そしてそういう女が信じるものをすべて信じたいのだ。ぼくの理想は教会に行つて穢れのない心でお燈明をあげることだ。⁽¹⁰⁾（『カラマーゾフの兄弟』第十一章九章）

「我在り」という意識が人間の苦悩の根源であり、「躓きの石」であるならば、いかに意識を消すかに一切はかかっている。イヴァンの悪夢の中での願望は、厄介な意識とは無縁の存在を夢想している——ここには意識から免

がれようとする強い意思が表現されている。

しかし、意識が存在自体であるならば、意識の抹消は存在の消滅につながるであろう。イヴァンの肥満した商家の内儀のなかに潜り込み、彼女の信じるものをすべて信じたという熱望は、内儀の意識をそっくりそのまま自分の意識にしたいということである。意識を無くすのではなく、どう変えていくかに作家の関心はかかっている。

イヴァンはこの世界が非意味の世界であることを認識している。自ら「意味」を創出してもそれが虚妄であることも承知している。「すべては許されている」苦の人間が虚構のなかでしか絶対者になれないのだとしたら、この非意味の世界を凝視して生きていくしかない。彼が「カラマーゾフの陋劣な力で生きる」と「卑劣漢」ぶって言っているのもこの認識の結果であろう。

それは人間のもつ本然の生命力で論理を打破ろうとする意志とどこかでつながっている。人間が論理に執着する限り、「我在り」の意識も、また変化しない。意識に振りまわされるだけで、不毛の循環を繰返す……

ドストエフスキーが以前からニヒリストたちの生命感につよい愛着を示してきたのはこのためであろう。ラスコーリニコフの「ガス燈に光ってまっすぐ降る雪」¹⁾も、キリーロフの「葉脈の透けてみえる木の葉」も論理を超える何かをもってしていると作家は信じていたに相違ない。イヴァンのアリョーシャに吐露する周知の章句はこの生命感の集大成にも思える。

ぼくは生きたい。だから論理に逆らっても生きるだけだ。たとえものの秩序を信じないとしても、ぼくにとっては、粘っこい、春、芽を出したばかりの若葉が尊いのだ。瑠璃色の空が尊いのだ。

……ぼくは粘っこい春の若葉や、瑠璃色の空を愛するのだ。それだけのことだ！⁽¹²⁾ ここには知性も論理もない。ただ肚の底からの愛が、初々しい自分の若い力への愛があるばかりだ。(『カラマーゾフの兄弟』第五篇三章)

作者はわざわざ「肚の底からの愛」というのはよかったですね」とアリョーシャに賛同させている。「論理」に對抗するものとしてドストエフスキーがストレスを置いたのは確かであろう。

世界が非意味であろうとなかろうと、それとは何の関係もなく、春若葉は芽を出す。生命は循環し、流れ、一瞬もとどまることはない。生成する世界は否定でも肯定でもなく、そこに在るだけであり、そこに特別な「意味」を付そうとすることは意味のないことなのだ。イヴァンは、これまでの地下人やキリーロフの立っていたところからは一歩突き抜けた所にいる。

イヴァンは「墓だ」評されたが、彼には先人たちの「熱狂」が乏しい。アリョーシャへの「熱烈な告白」にも「嘴の黄色い青二才」の正確な自己認識の上に立っている。奇妙なことに彼に情熱があるとすれば、むしろ、生命を語る部分であろう。

しかし、ドストエフスキーはこの「肚による愛」がイヴァンを救いきれないことも承知している。それは極限まではいくにしてもそれ以上は難しい。イヴァンにとって「論理」とは「意識」のシノニムだが、生命への「内発的な愛」が意識を超越することも変革することも不可能にちかい。

一方に「春の若葉」があり、他方にイヴァンがいる。見られるものと見るものの対立は消えない。この二元の中では意識の「処理」は困難だとドストエフスキーは観じたのであろう。

この点では癩癰の宿痾をもつキリーロフのほうが易しい。彼の「木の葉」は今現実に対象として存在するものではない。すでに彼の頭のなかで両者——「意識」と「木の葉」は重なっている……

ぼくはついこの間、黄色い葉を見ましたよ。緑のところが少くなって、端の方から枯れかけていた。風で飛ばされてきたんですね。ぼくは十ばかりの頃、冬、わざと目をつぶって青々とした、葉脈のくっきり浮き出た葉を想像してみたものです。太陽がきらきら輝いている。目をあけてみると、それがあまり素晴らしかったので信じられない。それでまた目をつぶる。⁽¹³⁾（『悪霊』第二篇一章五）

キリーロフが木の葉なのか、木の葉がキリーロフなのか——我もなく対象もない。見る者の意識は消え、自然の一端となる……。ただ、これは本当に見ていると言えるのだろうか。彼のイマジネーションの世界のなかだけの作用ではないのか。キリーロフだけが可能であって他の者には難しいのかも知れない。ことにイヴァンのように意識の透徹した者には……

IX

イヴァンがこの世界は非意味の世界だと認識すれば、ゾシマは、事物の根源は他界にあってその秘儀はこの世界には十全に顕現しないからだと言うであろう。ドストエフスキーはこの相容れることのない両面を描きながら何を想っていたのであろうか。「意味」は全くないのか、「意味」はありながら顕れないのか。

多分作家は、二人は限りなく隔っているようにみえて、実はそうでもないかも知れないと考えていたのであろう。

イヴァンも、勿論ゾシマもすでに「意味」にこだわってはいない。彼らを隔てているものは、生成する世界をどうみるかだ。世界は「事件から事件を生み——ただ流れていく——現象は現象としてのみ存在し、それ以上でもそれ以下でもない。

しかし、ゾシマは他界に秘密の根源があると言っているが、すでにこの世界の現象のなかに実在をみている。ゾシマには、現象は単なる現象ではなく、生成流転する世界はただいたずらに生成流転しているのでもない。

イヴァンがその生命感をバネにして「論理」を超えた世界に飛び込むとしているとすれば、彼の生命への「内発的な愛」はゾシマの宇宙感と決して無縁ではないだろう。アリオシャの言う「前半」は成就されたのである。

問題はイヴァンがゾシマにちかい「感覚」をいだけるかどうかだ。作家の思いは一点に絞られている。

明るい、静かな、暖かい七月の夜で、広々とした川面からは水蒸気が立ちのぼり、われわれの気分を爽やかにしてくれた。かすかに魚が跳ね、小鳥たちは沈黙し、すべてのものが静かに気高く、万物が神に祈りをささげていた。寝ないでいたのはわれわれ二人、私とその若者だけであつた。われわれは神の世界の美しさとその神秘について語り合つた。一本一本の草、一匹一匹の小さな昆虫、一匹一匹の蟻、黄金色の蜜蜂、知性をもつていないすべてこれらのものが、驚くばかりおのれの道を心得ていて、神の秘密を証明し、自らその秘密をたゆみなく行っているのである。(『カラマーゾフの兄弟』第六篇一章13)

ゾシマは愛着をこめて万象を嘗めるようにみている。目の高さが対象物と同じになり、そのままそれと同化する。彼の意識は消え、ゾシマは草でも蟻でも蜜蜂でもある。彼はそこに宇宙の实在を体现したと信じている。主観も客観もなく、我も彼もない。それは神秘ではなく、現象を突き抜けた地点に立っているということであろう。

イヴァンはゾシマの境地を知らない。彼は彼なりの道を歩いてきた。イヴァンはまたイヴァンの流儀で「粘っこい春の若葉」を愛し、「瑠璃色の空」に愛着をいだく。彼自身あまりよくわからない衝動から「論理」を突き破つて「生命」の側に立つとうとする。イヴァンの感覚は自ら「春の若葉」になるところまでは達していない。それが当然なのだ。自己を忘れ去ることが出来れば、アリョーシャが言つた「後半」まで成就されることになるだろうが、イヴァンの知性はそれを拒んだ。

ドストエフスキーは最後まで忠実にイヴァンの後を追ひ、彼の望むとおりの人生を辿らせた……

イヴァンの「後半」は成らなかつたが、ドストエフスキーは生涯をかけて追究した「論理」の世界の極限にイヴァンを置いたのである。

注

- (1) V・バザノフ他編 ドストエフスキー三十卷本全集第一五卷『カラマーゾフの兄弟』2 三二二頁「ナウカ」出版所
レニングラート 一九七六年
- (2) 同前 三四頁
- (3) 同前 同頁
- (4) 同前 八三頁
- (5) 同前全集 第八卷『白痴』三四四頁 同前 一九七三年
- (6) 同前 三四三頁
- (7) 同前全集 第二八卷『書簡』1 五十頁 同前 一九八五年
- (8) 同前全集 第一四卷『カラマーゾフの兄弟』1 二二四頁 同前 一九七六年
- (9) 同前 同頁
- (10) (1)と同書 七三―四頁
- (11) 『罪と罰』第二篇六章
「ぼくはね、寒くて暗い湿めっぽい秋の晩——それはどうしても湿めっぽい晩で通行人の顔がみな蒼白く病人みたいにみえるときでなくちゃいけない——手風琴に合わせて大道芸人が唄っているのをきくのが大好きですよ。でなければ、いつそ、ぼた雪が風もなくまっすぐに降っているときなら、もっといい、わかるでしょ、雪を通してガス燈が光っている……」
- (12) (8)と同書 二〇九―十頁
- (13) 同前全集 第十卷『悪霊』九三頁 同前 一九七四年
- (14) (8)と同書 二六七頁